

記号的消費社会論批判—ボードリヤールを中心に—

福 士 正 博

I はじめに

我が国の消費社会批判は、ソシュールの言語記号論を基礎に、初期ボードリヤールの研究を中心に展開されてきた。1960年代後半から70年代中葉にかけて発表されたボードリヤールの一連の研究が1980年代から90年代にかけて翻訳・紹介されるようになったことを契機に、消費社会に果たす記号の役割が注目され、記号を軸にした本格的な消費社会批判が行われるようになった。ボードリヤールは、生産秩序も、消費秩序も、「どちらも記号によって、記号に守られて存在している。現代社会のますます多くの基本的な面が、意味作用の論理や記号と象徴体系の分析の領分に属するようになってい¹⁾」と述べている。ヴェブレンの顕示的消費社会論、フランクフルト学派の文化産業論、ガルブレイスの「豊かな社会」論など、それまでの消費社会論が、消費から生じる社会的現象を産業社会に付随する「ねじれ」としてしかとらえていなかったのに対して、記号的消費社会論は、産業社会の発展を凌駕する論理を内在的に持ち、それが産業社会を批判する論理に反転するという、これまでの消費社会論には見られない異質な議論を展開しようとしていた。実際ボードリヤールは、マルクスの分析を基礎にしつつ、『物の体系』、『消費社会の神話と構造』、『記号の経済学批判』で展開していた生産の論理を否定し、その後発表した『生産の鏡』、『象徴交換と死』などで、消費の論理が全体の論理を包み込むようになってい²⁾という主張へと変化している。こうした生産の論理を否定し、消費の「社会的論理」が社会の隅々に浸透していくという議論は、現代消費社会を批判するばかりでなく、それ以前の社会にも通底する論理を提示しているという意味で重要な視座を提示していた。

しかしボードリヤールのこの変化は、消費が持つシミラークルやシミュレーションの世界を描き出す方向を明確にしたものの、消費社会を批判する肝心な視座を喪失していく両義性を持っていた。ボードリヤールの消費社会論が、記号という消費社会を貫く道具的理性を批判する視座を提供したものの、「消費社会に代わる社会とは何か」という問いに、現代社会において再興する余地のない象徴交換しか提起できず、最終的には、「カ・タ・ス・ト・ロ・フ・ィ・ックな戦略」を進めること、すなわち記号の古典的時代を終わらせるのは資本自身でしかないというように、記号に翻弄された消費社会の自然消滅の展望しか持てず、自滅してしまっていた²⁾。

本稿が、現代の消費社会批判の先に展望しているのは、ボードリヤールが主張するような象徴交換ではなく、人々の社会的実践 (social practice) に基づいて行われる持続可能な消費 (sustainable consumption) である。それは、現代の消費社会、したがって記号的消費社会が非持続的であるという意味で、それを反転することを目指した新しい消費様式である。勿論、大量生産—大量消費につながる記号的消費様式に、持続可能性 (sustainability) を付け加えれば新しい消費様式が生まれるなどといった単純なものではない。欧米では、持続可能な消費研究が活発に行われており、その方法も多様である。本稿でセオドール・シャツキ、アンドリース・レックヴィッツなどの社会的実践理論第2世代の研究成果と、それを消費分析に適用したエリザベス・ショブ、アラン・ウォードなどの議論に注目するのは、多様な持続可能な消費研究の中でも、社会的実践というこれまでにない新たな視座から停滞した消費分析を切り開こうとしているからである。本稿は、彼らの研究成果を参考に、社会的実践という視座から持続可能な消費という新しい消費様式を考察しようとしている。この視座には二つの軸が交差している。ひとつは言語記号論に基づいた消費社会論に対する持続可能な消費論による批判、もうひとつは言語記号論に対する社会的実践理論による批判である。本稿が直接対象としているのはボードリヤールの記号的消費社会論 (批判) であるが、その先を目指しているのは、社会的実践という視座から持続可能な消費の意義を明らかにすることにある。新しい消費様式を展望するには、ボードリヤールの研究を下敷きに数十年にわたって続いてきた記号的消費社会論に対する批判的考察が不可欠となる。ボードリヤールの研究がわが国で紹介されて以後、1980年代から90年代にかけて行われた現代消費社会批判は、30年後の現在においてもほぼ横滑りした状態でしか行われていない。本稿の背景にあるのは、こうした消費社会を批判する方法論上の停滞である。

II 言語記号論と社会的実践理論—文化理論における位置

記号的消費社会論も、社会的実践理論に基づく持続可能な消費論も、どちらも文化理論から派生した議論である。文化を社会の意味構成や秩序として理解しようとする文化理論にとって、現実の世界は人々が共有する意味を通して構成されている。ギアーツの急進的解釈学の台頭以来、1970年代から80年代にかけて行われた文化的転回は、功利主義的社会理論や規範的社会理論に対して、社会秩序は意味を構成する文化によって構成されているという世界観の転換をもたらした。功利主義的社会理論が求めるホモ・エコノミカスモデルは、個人の目的、意思、利害から行為や社会秩序を説明しようとしている。その一方、規範的社会理論が求めるホモ・ソシオロジカスモデルは、集団的規範や価値の追求からそれを説明しようとしている。文化理論が求めるホモ・シンボリクスモデルは、人々による意味の理解・解釈・構築によって説明しようとしている点で、伝統的な社会理論と異なる理論構成をとって

いる。こうした違いを明らかにするために、レックヴィッツが明らかにした文化理論の特徴とは次のようなものである。

「文化理論の新しさは、主体が一定の形式にしたがって世界を解釈したり、それにとまなうやり方で振る舞うことを可能にし、制約している知識の象徴的構造を再構築することから行為を説明、理解しようとしていることにある。社会秩序はその場合、相互の規範的期待の応諾物として現れるのではなく、集团的認識構造や象徴構造、そして意味を世界に帰す社会的に共有した方法を可能にする「共有知識」に埋め込まれたものとなっている³⁾」。

文化理論が社会秩序や社会的なるものを知識の象徴的構造や認識構造に求めようとするかぎり、その成立基盤についても説明しておく必要がある。文化理論が知識の象徴構造の再構築を共通項とするといっても、それをどのようにとらえるのかによって様々な思潮が交錯することになる。この状況を解きほぐすには、それぞれの特徴を浮き彫りにし、比較してみる必要がある。

レックヴィッツは、文化理論を、文化メンタリズム、文化テキスト主義、間主観主義、社会的実践理論の4つに分節化し、それぞれの成立基盤を比較した上で、社会的実践理論の立場を明らかにしようとしている。社会的実践理論が文化理論に含まれるその他の思潮の批判から登場してきた経緯からすると、その出自を明らかにするためにも、批判の論点を明らかにしておく必要がある。ボードリヤールの記号的消費社会論を社会的実践理論の視座から批判的に考察しようとする場合、社会的実践理論の位置を確定しておかなければならない。とくに言語記号論が属する文化テキスト主義と社会的実践理論との比較が重要である。第1表は、レックヴィッツの分類にしたがって、その要点をまとめたものである。

記号論がポスト構造主義とともに文化テキスト主義に属しているとまとめられているように、ボードリヤールの記号的消費社会論もこのカテゴリーに属している。文化テキスト主義は、意識であれ、無意識であれ、「知識や意味構造の場」である人々の精神構造から社会的秩序が構成されると考える文化メンタリズムに対する批判から生まれた。文化テキスト主義が想定する知の象徴構造は言説、コミュニケーション、テキストなど、人々の主観を超えた、精神構造の外側で構成される。それに対して社会的実践理論の最小基礎単位は実践である。後述するように、文化テキスト主義が言語を用いた「述べること」に特化した象徴構造を基礎単位としているのに対して、社会的実践理論は、「述べること」という言語実践も含めた身体的な「すること」を分析の基礎単位としている。それは、「述べること」と一体となった「すること」、すなわち実践である。「実践とは、身体が動かされ、対象物を扱い、主題が扱われ、ものごとが叙述され、世界が理解される、ルーティン化した方法である⁴⁾」。

第1表 文化理論の4つのバージョン

文化メンタリズム	社会分析の最小基礎単位：人間の精神構造 根拠①哲学的カント主義, ②知性主義, ③精神の内部性 二つのバージョン ① 主観主義的バージョン 意識の精神構造；シュッツの社会現象学 ② 客観主義的バージョン 無意識の精神構造；レヴィストロースなどの古典的構造主義
文化テキスト主義	社会分析の最小基礎単位：象徴構造（象徴, 言説, コミュニケーション, テキスト） 人間の精神構造の「外側」 社会的なるもの：象徴の超主観的レベル ① ポスト構造主義, 記号論：フーコー『知の考古学』 ② 急進的解釈学 ③ ルーマンの社会システム構築理論
文化間主観主義	社会分析の最小基礎単位：相互行為, 間主観性 相互行為を行う精神を持つ人間
社会的実践理論	社会分析の最小基礎単位：実践 主体は行為の担い手 身体活動, 精神活動, 理解, ノウハウ, 感情, 動機などの諸要素の組織化とルーティン化 「すること, 述べること」

（出所） Andreas Reckwitz, Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing, *European Journal of Social Theory*, 5 (2), 2002, pp. 246-250 より作成。

Ⅲ 「すること」, 「述べること」の一体性

言語記号論と社会的実践理論を比較する上で最も重要な論点は、「すること」(doing)と「述べること」(saying)の関係性である。

社会的実践とは、「すること」, 「述べること」が一体となった人間が行う活動 (activity) を総称したものである。しかし、パフォーマンスという意味での活動がそのままただちに実践となるわけではない。また活動や行為と実践は置き換え可能な概念でもない。シャツキが指摘しているように、「実践を社会生活の基本的構成要素として扱うことが正当であるのは、理解や知性こそ社会的存在の基本的秩序の媒介物であるという事実にある⁵⁾」。実践とは「理解が構造化され、知性が分節化される場」と考えるシャツキにとって、「述べること」で裏打ちされた分節化された知性を、「すること」(狭義の活動)を通じて、実践という広義の活動にまで昇華するものでなければならない。このことは、「述べること」という言語活動だけでは不十分であることを意味している。この点は、言語記号の果たす役割との関連で重要な意味を持っている。言語実践だけを独り歩きさせてはならない。

「知性の分節化について議論する際、私は、その中に、言語に何らかの具体的意義を含めていないということをつけ加えておきたい。言語だけが知性を分節化しているわけではない—身体的行動も身体的反応も同時にいたるところで基本的な役割を果たしている。言語はまた、人間生活に浸透している理解や知性を完全に分節化することができない。このように、実践こそ最も基本的な社会現象であると同時に、知性が分節化される場であるという場合、社会的存在がいくつか基本的な点で言語に還元されるとか、実践に関する全てのことがらが言語で表現できるなどと考えるてはならない⁶⁾」。

「述べること」は狭義の実践を意味している。しかし、身体化された活動が言語活動を吸収し、両者が一体とならなければ、その活動の意味を表出することができない。言葉を発するだけでは意味は生まれない。実践が言語に先行し、言語を吸収するのである。言語に先立つ実践、これが文化理論の中から社会的実践理論が登場してきた理由である。

社会的実践理論にとって両者は常に一体であるのに対して、言語記号論は「述べること」だけを強調する傾向にあり、「すること」を切り離すことで、「すること」の意味を覆い隠し、独り歩きさせてしまっている。「述べること」だけが独り歩きしてしまえば、「すること」の裏付けをなくし、「述べること」の信憑性を自ら放棄してしまうことになる。その結果どうなるか。ボードリヤールがシミュレーションの世界に沈潜し、消費社会を改革する展望を失ってしまったのも、「述べること」で描き出される擬似的世界でしか消費社会を批判する論理を探ることができなくなり、閉ざされた世界で行き場を見つけれなくなってしまうからである。ボードリヤールには、「すること」の視座が欠けている。同時に、次のレックヴィッツの指摘に見られるように、「すること」と「述べること」の一体性は、「述べること」自体が言語実践として「すること」に他ならないという同義的意味を持っていることにとどまらないのである。

「実践は、(これまで社会理論の中で間違っって特権化されてきた)述べるという形態ばかりでなく、するという形態もとっている。すること、述べることは精神的な能力として、或いは象徴のつながりとして概念化することはできず、それ自体まず何よりも、規則的に身体化された活動として示されている。社会的に慣行化された「認知可能な」実践を形成するために、こうした身体化された活動は知識によって「組織される」必要がある⁷⁾」。

ボードリヤールが描く消費社会批判がソシュールの言語記号論を基礎にして展開されているだけに、それを批判するには、記号世界へ内在しただけでは言語記号が持つ制約から脱け出すことができず、その論理にからめとられてしまうという認識を持つことが重要となる。「すること」と「述べること」は車の両輪のように一体のものであり、相互に補完し合う関係にある。正確に言えば、このような認識自体が、「言語の本質はその《非記号性》にある⁸⁾」というソシュールに回帰することでもあった。ボードリヤールの記号的消費社会論は、ソシュールを換骨奪胎することで成立していたと言ってもよい。

ソシュールや丸山がつとに指摘したように、言語記号論の革新性は、言葉によって、そして言葉とともに記号内容が特定されることにある。しかしこのことはあくまでも記号体系の中で行われるだけで、その外にある対象をそれ自体として直接映し出しているわけではない。言葉が表す記号内容や指示対象はどこまでいってもフィクションである。このことを無視して、「コトバにこそ現実構制の能動的契機がある⁹⁾」などと言うことは、リアリティの世界との混同を招くだけで、誤りである。言葉が描くフィクションの世界を実在の世界に引き戻すには、「すること」によって媒介された実践が言語活動とともに行われていなければならない。この関係を明らかにしようとしたのが、『哲学探究』に代表される後期ウイトゲンシュタインであった。シャツキが『社会的実践 人間の活動と社会的なるものに向けたウイトゲンシュタイン的アプローチ』で、後期ウイトゲンシュタインの思想的役割を追究したのも、「すること」と「述べること」の関係を実践理論の立場から明らかにする必要性を感じたからである。

シャツキは、『社会的なるものの場』の中で、社会的実践を次のように定義している。

「実践とは行為の組織化されたつながりである。このことは、実践を構成している、すること、述べることがともにつながっているということの意味している。より具体的には、実践を構成している、すること、述べることは、(1) 実践的理解、(2) 規則、(3) 目的志向構造、そして(4) 一般的理解、を通じてつながっているということである。ある実践における、すること、述べることをつなげている理解、規則、目的志向構造が一緒になってその組織化が行われている¹⁰⁾」。

ここでは、実践とは行為の組織化であると定義したうえで、「すること」、「述べること」が一体である理由が示されている。「すること」、「述べること」は、実践的理解、規則、目的志向構造、一般的理解という構成要素が結びつくことで、実践という形式をとることになる。「すること」、「述べること」は本質的に一体のものであり、どちらかを優先できるというものではない。非記号性という言葉の本質を実体化しているのは、「述べること」が「すること」という実践に根拠づけられているからである。しかし、ソシュール以後顕著になった言語論的転回は、テキストとしての言説を重要視するばかりに、実践を「述べること」だけの集合として概念化してしまっている。確かに、「述べること」による意味の概念化は社会的秩序を構成する重要な要素である。しかし、このことだけを独り歩きさせてしまえば、社会は精神構造から生まれるという、フッサールやシュッツなど社会現象学に見られる文化メンタリズムと変わりがなくなってしまう。「述べること」は実践知の一部しか構成しないという認識を欠いてしまえば、現実世界とのつながりをなくし、宙に浮いて漂うだけの、行き場のないものになってしまう。この誤りをボードリヤールも犯している。実践との裏づけがなければ、結局シミュラクルの世界に迷い込んでしまうことになる。

IV ウィトゲンシュタインの実践理論

実践理論の革新性は、「理解や知性こそ社会的存在の基本的秩序の媒介物であるという事実」に基づいて行われる実践によって社会生活が構成されていることを強く押し出したことにある。しかし、ブルデュー、ギデンズ、リオタード、テイラーなど広義の実践理論家は、実践を基本的な社会的現象と見ることで一致していたものの、理解や知性をどのように扱うについて必ずしも自らの立場を明確にしていたわけではなかった。これを行ったのは後期ウィトゲンシュタインである。ウィトゲンシュタイン自身は実践自体を分析の基本対象として取り上げることをしていない。しかし、規則遵守、生活形式、家族類似性、言語ゲーム、私的言語など、ウィトゲンシュタインが提示した基礎的タームは、実践の意義を明らかにする上で欠かすことのできない概念となっている。

シャツキは、「すること」、「述べること」が理解によってつながっている点について次のように述べている。

「すること、述べることは、それが行われ、X をするという理解を背景としている文脈上で X をすることが構成されているということである。私はたった今、X をするという分散化した実践が X をすることの理解によるつながりを持った、すること、述べることの集合であると説明した。すること、述べることは、X をするという実践によって行われた理解の背景の上で X をすることを構成しているということである。どの所与の X をするという場合であっても、結果的に実践が前提とされている¹¹⁾」。

ここで登場する分散化した実践 (dispersed practice) とは、述べる、命令する、規則に従う、説明する、質問する、報告する、調べるといった実践を指している。料理をする、テニスをする、選挙で投票する、車を運転する、ビジネスを行うといった具体的で、複雑な要素が含まれた実践 (シャツキは統合的実践 integrative practice と呼んでいる) を基礎づける、単独で成立する実践型式である。しかし、統合的実践は分散化した実践をたんに集合したものではない。分散化した実践が統合的実践へ転化していくには、実践の組織化という過程をたどらなければならない。すなわち、組織化「する」という過程である。

シャツキによれば、実践を行う理解には三つの能力が必要とされる。

- (1) X という行為 (述べること、命令すること、疑問に思うことなど) を行う能力
- (2) 自己及び他者の両方において、X をすることの意味を同定、帰属する能力
- (3) X をすることに対応した能力

シャツキはここで X を分散化した実践という意味で使っている。ここで重要なことは、分散化した実践が成立する理解能力が必要とされるのは、上記 (1) と (2) だけであること、(3) の「X をすることに対応した能力」が、分散化した実践を統合的実践に導く能力を指していることである。つまり、(1)、(2) の理解能力だけで成立する分散化した実践が、(3)

の能力が加わることで、統合的实践に昇華することが実践の組織化にあたる。(1)は、文字通り、述べること、命令すること、質問をするといった分散化した実践を行う能力を指している。(2)は、それを行うことの意味を理解する能力を指している。それは、規則に従うことでもある。「理解の第3要素がない場合の実践とは規則に従うことである。Xをすることへの決まった対応がしばしば分散化した実践を構成するということに注意せよ」とシャツキは述べている。ウイトゲンシュタインが「規則に従うこと、報告すること、命令すること、チェスをすることは慣習である」(『哲学探究』199)と述べる時の慣習とは、シャツキが指摘する理解能力の(2)を指していることに注意しておきたい。ウイトゲンシュタインが主張する規則遵守の意義と社会的実践が重なり合うのはこの部分である。ウイトゲンシュタインは規則遵守について次のように述べている。

「我々が「ある規則に従う」と呼んでいることは、たった一人の人間が生涯でたった一度だけ行うことができるようなことなのか。……たった一度だけ、たった一人の人間がある規則に従っていた、などということはありません。たった一度だけ、たった一つの報告がなされ、一つの命令が与えられ、あるいは理解されていた、などということはありません。ある規則に従い、ある報告をなし、ある命令を与え、チェスを一勝負するのは、慣習(慣用、制度)なのである」(『哲学探究』199)。

ウイトゲンシュタインの言語ゲームは、私的言語と異なり、複数の者による無限に繰り返される会話(コミュニケーション)である。意思疎通が成立するためには、言葉の意味は確定されていなければならない、会話に参加する者同士の了解が、言語を使用する慣習や生活形式から生まれてくることを前提としている。しかし、言葉は、「赤い」、「五つの」など、それ自体で意味を確定することのできない形容詞や数詞を含んでいる。この難点を克服するためにウイトゲンシュタインが指摘したのは、言語自体に先立って慣習的に行われている言語の使用であった。ウイトゲンシュタインによれば、このこと自体人々が行う生活形式を意味している。「一つの言語を想像するということは一つの生活様式を想像することに他ならない」(『哲学探究』119)、「意味」という語を利用する場合に、ひとはこの語を次のように説明することができる。すなわち語の意味とは、言語内におけるその慣用である」(『哲学探究』43)。

言葉の意味を慣習的な言葉の使用によって了解するというウイトゲンシュタインの理解は、言葉を解釈しないということである。人が言葉という記号を用いるとき、人は道標に従うのと同じ行動をとっている。何故なのか。ウイトゲンシュタインが問題にしたのは、「記号に従うというこのことがそもそも何によって成り立っているのか」という問いである。この問いにウイトゲンシュタインは、「わたくしがまたさらに暗示したのは、ひとはある恒常的な慣用、ある慣習のときにかぎって道標に従う、ということなのである¹²⁾」と答えている。意味を同定するのは言葉の使用によってである。言葉を日常的に頻繁に繰り返し使用するこ

とによって、慣習化されて意味が規則化される。ウイトゲンシュタインは、この点について、「規則に従っているとき、わたくしは選択をしない。わたくしは規則に盲目的に従っているのだ」(『哲学探究』219)と述べている。

シャツキは、ウイトゲンシュタインがここで述べている規則遵守やそれを慣習化したことで成立する制度を、(2)の理解能力を具体化したものであると高く評価している。シャツキが「分散化した実践概念を言語ゲーム概念に関係づけてみなければならない」と指摘しているのは¹³⁾、日常的に行われている、例えばチェスというゲームが言語という日常的に使用されている言葉の交換によって、慣習化された理解に裏付けられて行われていることである。慣習化された制度は無意識のうちに従うものと受け止められている。

このように、(2)は、Xをすることの意味を述べることで、その能力を同定、帰属させる言語能力を指している。後述するように、シニフィアン、シニフィエが一体となった言語記号の果たす役割は、記号を発出することで、意味を表出することにある。この役割が發揮されるのは記号体系の中だけである。(2)の能力は分散化した実践に当てはまる能力であるから、言語能力も分散化した実践の限りにおいてである。表出された意味は分散化した実践と関わるだけである。実際の生活において実践は統合的实践として行われるのが普通であるから、言語能力だけでは、実践の理解は完結しない。「述べること」は「すること」によって補完されていなければならないのである。知性は、もともと、言語だけでは完全に埋め合わせられない実践的現象である。

したがって問題は(3)の理解能力である。この能力は、分散化した実践を基礎に、それを統合的实践に昇華する能力を指している。「Xをすることに対応した」という意味は、X自体を問題にしているというより、Xから派生して、具体的で、複雑な統合的实践と関わることで求められる理解能力を指している。統合的实践のレベルで求められる要素について、シャツキが述べていることを聞いてみよう。そこで指摘されている要素が、統合的实践のレベルにおける構成要素にあたる。言うまでもなくそれは、分散化した実践で求められている理解能力を横滑りしたものではない。

「分散化した実践と同様、統合的实践は、つながりのある、すること、述べることの集合である。そこに含まれている、すること、述べることは、(1) Xをすること、Yをすることの意味付けられた理解に沿って、Qすること、Rすることの理解(後者はXをすること、Yをすることという分散化した実践が統合実践のなかで採用している転化形態によって行われているものである)、(2) 明確な規則、原理、認識、指示、(3) 目的、タスク、プロジェクト、信念、感情、ムードなどの階層性を含んだ目的志向構造、のまとまりである。¹⁴⁾」。

(1)に示されているXやYは分散化した実践を、QやRはそれに基づいて行われる統合的实践を指している。(1)は、分散化した実践が統合的实践に昇華されて行われることの理解が必要となることについて述べている。統合的实践の組織化の具体化の中で言及される

「Qすること、Rすることの理解」とは、そうした実践の中で確立された相対的に単純な活動を構成している、すること、述べることをつなげている理解なのである、とシャツキは述べている。

(2) は、人々が統合的实践を行うとき、規則、原理、認識、指示を承認し、それに従うということである。分散化した実践にこれらの要素は含まれていない。ここで言う規則や原理は、分散化した実践を論じた際に説明された、慣習化されることで人々が従っている規則を指しているものではない。すでに出来上がっており、それに無意識に従うだけの制度としての慣習ではなく、自らで作り上げるものだからこそ、常に再帰的關係にさらされ、流動の状態にある、統合的实践を行うときに登場する新たな規則を指している。分散化した実践は、こうした規則から自由だからこそ、様々な生活の中で普遍的に存在するものとなる。しかし統合的实践では、分散化した実践において同定される規則をそのまま受け入れるというものではない。同じ実践でも、分散化した実践では無意識のうちに慣習化された規則に従うことによって意味が同定されるのに対して、それだけでは統合的实践は決まらない。ウイトゲンシュタインは、このパラドックスを克服するには、規則に従うことと規則に従っていると信じることは同じではないこと、すなわち、「規則のある表現を別のある表現で置き換えたものこそ「解釈」と呼ぶべきであろう」と述べ、その理由を明らかにしている。

ここでウイトゲンシュタインが言っていることを理解するには、例えば、サッカーの規則とプレーとの関係を想定すればわかりやすい。サッカーに限らず、スポーツが競技として成立するには規則が必要である。選手は規則を了解したうえでプレーしている。しかし、規則を理解しているからといって、そのことですぐれたプレーができるのか、試合に勝てるだけの実力がつくというものではない。規則を了解し、それに沿ったプレーを行うことを約束したうえで、ドリブルやシュート、他のプレイヤーとの連携など様々な技術を磨き、相手チームを圧倒する能力を身につけていくことが求められる。上記(2)の規則とは、明文化された決め事ではなく、すでに出来上がった規則を了解した上で、規則を自ら解釈し、実践を鍛え上げ、新たなレベルに引き上げていく、プレイヤー同士の柔軟な合意を指している。永井が指摘しているように、「ルールとプレイのこの逆転こそが、後期ウイトゲンシュタインの「言語ゲーム」の最大のポイントである¹⁵⁾」。分散化した実践における意味の同定と、統合的实践における規則の了解とはレベルが異なる。

「サッカーやチェスのルールを知っていることと、それらのゲームが「できる」こととは同じではない。……サッカーやチェスが「できる」ためにはそのための技術や能力を必要とし、さらに本当にできるかどうかを判定するのは慣習というゲームなのである¹⁶⁾」

このことは、(3)の目的志向構造とつながっている。サッカーの規則を了解するとともにその能力を高めるのは、例えば試合に勝つといった目的に近づくためである。実践は目的の実現を目指して行われる。シャツキはしばしば、目的をタスクやプロジェクトという呼び方

に置き換えているが、眼前の課題を達成するという意味が加わるだけで、その趣旨に変わりはない。

V シニフィアン、シニフィエ、指示対象

それでは、ボードリヤールはどのような誤りを犯しているのだろうか。端的にそれが現れているのは、モノを指示対象（レフェラン）と混同してしまっている点にある。ボードリヤールは、『記号の経済学批判』の中で、使用価値をシニフィエ（記号内容）に、交換価値をシニフィアン（記号表現）と位置づけている¹⁷⁾。

$$\frac{\text{交換価値}}{\text{使用価値}} = \frac{\text{シニフィアン}}{\text{シニフィエ}}$$

マルクスの価値形態（商品交換）論上、このように二つの価値を位置づけることは理論的に間違っている。価値形態からすれば、使用価値がシニフィアン、交換価値がシニフィエでなければならない。ボードリヤールの認識では価値形態における指示機能と意味表出が逆転してしまっている。この誤った位置づけを前提にボードリヤールは、使用価値と交換価値の関係を次のように述べている。

「使用価値と意味サレルモノには戦術的価値があるが、交換価値と意味スルモノには戦略的価値があると言っておこう。体系は、機能的であるが、ヒエラルヒー化された両極性にしたがって構成され、そこでは交換価値と意味スルモノが絶対に優越する。使用価値と必要は交換価値の効果にすぎない。意味サレルモノ（と指示対象）は、意味サレルモノの効果にすぎない。いずれも、交換価値または意味スルモノがそのコードによって表現し、翻訳する自立的な実在ではない。結局それは、交換価値と意味スルモノとの運動によって生産された、シミュレーションのモデルにほかならない¹⁸⁾」。

ここでボードリヤールが言おうとしていることは、「使用価値の体系は、交換価値の体系のイデオロギー的保証」でしかないこと、交換価値すなわち意味スルモノが、使用価値すなわち意味サレルモノを絶対的に規定していることによってシミュレーションモデルが生まれるということである¹⁹⁾。使用価値と交換価値は等価関係ではなく、そこにはヒエラルヒーが存在している。「この関係（注：使用価値と交換価値の関係）は、支配的な形態と、アリの的もしくは衛星の形態とのヒエラルヒー的関数として成立している」とボードリヤールは述べている²⁰⁾。交換価値が使用価値を置き去りにしていくという、ここで述べられているボードリヤールの主張は、物象化された世界が生まれる論理を引き出すという点からすると必ずしも間違っているというわけではない。しかし、物象化された世界との関係でそう言え

るだけであって、価値形態論から導き出されるとか、シミュレーションの世界と結びつくということとは別の問題である。シミュレーションの世界とはモノの世界が戯画化してしまっている世界である。その世界を明らかにするには、「意味作用の運動の法則、交換価値の運動の規則」であるコードの発生過程を明らかにする必要があるとボードリヤールは言う²¹⁾。ボードリヤールが使用価値を意味サレルモノ、交換価値を意味スルモノと定めたのは、「形態／商品が直接に意味作用の効果を持ちうるのは、記号の構造が形態／商品の中心そのものにあるからである」と述べられているように²²⁾、言語記号が持つ構造との結びつきであった。

ボードリヤールのシミュラクルやシミュレーションの世界の虚構性を明らかにするには、何よりもモノの位置を確定しておく必要がある。ボードリヤールの場合、記号が果たす意味作用から、モノという実体をどのようにつかまえようとしているのだろうか。ボードリヤールは、意味スルモノ（交換価値）、意味サレルモノ（使用価値）、指示対象の関係を次のように整理している。

「分割は、形態としての意味スルモノと、意味サレルモノ・指示対象とのあいだでなされる。意味サレルモノ・指示対象は、意味スルモノの支配下において、思考の内容、實在（或いは知覚）の内容としていっしょに存在する。ここで問題とされている指示対象は、意味サレルモノよりも記号の外側にあるのではない。この指示対象は記号に支配され、記号によって分離されていて、記号の背後に存在する以外の実在をもっていない。強い意味で、指示対象は記号を反映している²³⁾」。

最初に確認すべきことは、言語記号論を分析の土台に置くかぎり、ここで言う指示対象が現実に存在する実体ではないことである。それは、使用価値も交換価値も抽象化された価値形態でしかないのと同様に、指示対象も言語記号が生み出す非在としてのモノにすぎない。「指示対象は記号に支配され」、「記号の背後に存在する以外の実在をもっていない」という指摘にこの点ははっきり示されている。問題は、指示対象の位置である。ボードリヤールの記号論の特徴を明らかにしようとした巨明志氏の整理によると、ボードリヤールは、シニフィアンとシニフィエ・指示対象の間に分割線を引いていると言う。

シニフィアン／シニフィエ・指示対象

ボードリヤールによれば、「指示対象は、シニフィエと同様、シニフィアンに支配されており、記号体系の外側にいかなる実在性も持たない²⁴⁾」。こうした認識は、ソシュールの分割と根本的に異なっている。ソシュールの分割は、巨氏の整理では次のようになる。

シニフィアン＋シニフィエ／指示対象

この整理から、亘氏は、ソシユールの場合、「指示対象は記号体系の外側に分離されているがゆえに、実在性を持ち、記号を支えている²⁵⁾」と述べている。しかし、ボードリヤールによれば、「意味スルモノと意味サレルモノを《同等に》扱うことによって、ソシユールのこの理論は、意味作用のあらゆる体制を隠している」のであり、この分割自体批判されなければならない。何故なら、「全体を支配しているのは、交換価値の体系と意味スルモノの運動との合理的抽象化である」からである²⁶⁾。

両者が行う分割についてどちらに軍配をあげるべきなのだろうか。丸山は、ボードリヤールには「ダイナミックな記号論の装置の欠如」があると指摘している²⁷⁾。この欠如は、言語記号論の誤解、正確に言えば結論を急ぎすぎることから生じる論理的飛躍から生じている。価値形態論において使用価値と交換価値の位置づけが逆転してしまっていたように、ボードリヤールは、ここでも、シニフィアンとシニフィエを間違えて位置づけている。言語記号の特性からすれば、シニフィアンとシニフィエは常に一体であり、分割することなど本質的にできないものである。言葉は、「表現と意味を同時に備えた二重の存在」であり²⁸⁾、発することによって、自らのうちに意味を生み出す。しかしそれはあくまで、「自らのうちに」であって、言葉の外に存在するモノの意味を直接生み出すことができるというものではない。言語記号は本質的に、丸山が言う「構成された構造」の中でしか機能しないのである²⁹⁾。このことは、シニフィアンという記号表現とシニフィエという記号内容を分割してはならないことを意味している。その点からすると、亘氏が行ったシニフィアン+シニフィエという整理は、別々に存在していたシニフィアンとシニフィエがあたかもアポステオリに結合するような印象を与え、必ずしも正確とは言えない。正確を期すならば、シニフィアン・シニフィエと整理した方がわかりやすい。その上で、指示対象は、シニフィアン・シニフィエと分割されるのである。こうした誤りをボードリヤールが犯したのは、言語記号が持つ意味機能（したがってボードリヤールが考えるところのシニフィアン＝交換価値）を指示機能（同じくシニフィエ＝使用価値）より優先させ、そのことでシミュラクルやシミュレーションの世界を描き出そうとしていたからである。

さて、この比較からも分かるように、指示対象がシニフィアンに支配されているか否か（すなわち記号体系の外側にあるか否か）によって、その実在性が決定されることになる。シニフィアンとはボードリヤールの場合交換価値を指しているから、交換価値というボードリヤールが言う等価関係の論理が支配しているかによって、指示対象の実在性が決まることになる。

しかし、実は、亘氏のこの整理も、指示対象の位置を確定するという論点に関するかぎり部分的に間違っている。シニフィエ・指示対象とシニフィアンを分割した整理は、ボードリヤールの議論自体が正しいかどうかはともかく、ボードリヤールの議論を整理しようとしたかぎりにおいては正しい。指示対象はシニフィエと同様、シニフィアンによって支配されて

いるというのがボードリヤールの主張の核心だったからである。しかしこの整理を、指示対象と実在性の関係に関する整理と見るならば、完全に間違っている。ソシュールの基本概念を詳細に明らかにした丸山圭三郎がいみじくも指摘したように、「**指向**（指示と同義—引用者）とは、コトバによる言語外世界の一つの**解釈**であり、差異化である。一般的に、言語記号は言語外現実を指示しているように思われるが、その指示している指向対象は、コトバによって創り出された現実である³⁰⁾」。この指摘に見るように、指示対象は言語記号を用いた一つの解釈にすぎず、言語外現実を直接指しているものではない。丸山の言葉を借りるならば、指示対象はモノではなく**コト**にすぎない。モノの実在は形式でしかない。指示対象の理解が間違えば、記号体系の内にあるか外にあるかによって、実在性の有無も決定されるかのような誤解が生じてしまうことになる。

「ソシュール記号学の立場では、使用価値も交換価値も、ともにそれが価値である限りすでに実質から離れた形相＝関係であり、道具としての〈物〉のもつ有効性は、あくまでも非自然的・文化的価値でしかない。文化の世界にはすでに純粹な意味での〈モノ〉は存在せず、すべてコトバによって分節された〈コト〉であり、その〈コト〉は実在の中に指向対象を持たないのである³¹⁾」。

ボードリヤールの誤りは、言語外現実ではけっしてない指示対象、すなわち非在としての指示対象をシミュラクルの世界へ拡げ、それが実際の消費社会を動かしているという議論へつなげたことにある。つなぎの役割を果たしているのが、ボードリヤールによるデノテーション（外示的意味）とコノテーション（内示的意味）の理解である。シニフィアン＝交換価値、シニフィエ＝使用価値と規定したボードリヤールは、「同一の形而上学がデノテーション・コノテーションの概念において、メッセージのレベルで機能している」と述べている³²⁾。「同一の」とは、シニフィアンとシニフィエが結びついて構成されるシーニュが第1次言語でデノテーションの役割を果たすのに対して、第2次言語の段階で第1次言語の段階でのシーニュ自体が新たなシニフィアンとなることで新たなシニフィエを生み、コノテーションとしての意味を持つようになる関係が想定されている。ボードリヤールは、「デノテーションまたは使用価値、客観性または有用性は、つねに明証の支配下での実在とコードの結合である³³⁾」と述べているように、シニフィエにすぎない使用価値がデノテーションとして、交換価値が持つコノテーションとしての意味作用を隠してしまっていることを指摘している（デノテーション効果）。交換価値が使用価値を絶対的に規定していると考えるボードリヤールは、実際には使用価値がデノテーションとしての意味作用を持つものとしてしか現れないことを強く警告していた。ボードリヤールの場合、シミュラクルの世界は、「指示対象の蜃気楼」からそれほど遠くないところに存在していることになる。

VI 社会的実践理論におけるモノ

それでは、社会的実践理論はモノを理論体系の中にどのように位置づけているのだろうか。ここで言うモノは言語記号論で言う指示対象を指してはいるが、非在としての指示対象と実在としてのモノとは根本的に異なる概念である。文化理論におけるモノの位置という視座から、あらためてこの問題について考えてみよう。

レックヴィッツによれば、「文化理論は常に、物的なるものを、象徴的なるものとの関連でどこに位置づけるのかという問いに答えようとしてきた³⁴⁾」。社会秩序を知の象徴構造に求める文化理論にとって、象徴的なもの＝文化的なものとの物質的なものを区分するデカルト的な二元論に陥ることなくモノを文化理論としてつかまえるという課題は、伝統的な社会理論から離れるという意味でも重要となっていた。レックヴィッツはこの問いに、(1) マンハイム、シェラー、デュルケムに代表される知識社会学、(2) 構造主義、社会現象学、ポスト構造主義や構築主義的「テキスト主義」、ハバーマスの「間主観主義」、(3) ブルーノ・ラッセルの研究に見られる社会的実践理論、という文化理論の三つの思潮がそれぞれ答えようとしてきたと述べている。レックヴィッツはこの区分を類型論としてではなく、「文化理論は、第3の段階においてのみ、文化主義でもなく、物質主義でもないやり方で、文化的なるものと物的なるものとの関係を分類することのできる立場に到達しているように思える」というように、段階論としてとらえようとしている³⁵⁾。ボードリヤールの記号的消費社会論を社会的実践理論の視座から批判するという本稿の課題からすれば、とくに(2)の思潮を(3)の社会的実践理論がどのように批判的に受け止めようとしていたのが重要となる。先に明らかにした文化理論の分類からすれば、(2)は、文化メンタリズム、文化テキスト主義、間主観主義を一括してまとめたものと考えることができる。ここではとくに文化テキスト主義と社会的実践理論との関係を中心に見てみたい。

(1)の知識社会学では、物的なるものは、文化の外にある社会構造の中に位置づけられ、象徴構造が社会構造に依拠していることを想定した物質的議論として展開されている。こうした物質的議論は知識の集団的ストックの分析と結びついており、その意味で、知識社会学の議論は古典的な社会理論と文化理論の議論を併せ持つアンビバレントな性格を持っている。知識社会学において物的なるものは、社会構造を支える条件でありつつ、象徴的理解につながる萌芽を含んでいるという意味で、両者が交差する地点に位置していた。

(2)の思潮は、思潮間で様々な対立要素を含みながら、「物的世界は、文化の構造的な原因や条件としてではなく、言説や言語に基づいた相互作用の中で象徴的性格を得た対象として現れ、集団的意味構造の中で解釈の対象となるかぎりで存在する」というように³⁶⁾、象徴的性格を持ち、解釈の対象となる点で共通していた。異なるのは、象徴的秩序に帰する位置である。文化メンタリズムは、主観的バージョンにしても、客観的バージョンにしても、

「精神的カテゴリーを社会秩序の「内的」資源であることを前提とし」ており、主体と客体を区分するカント哲学に基づいて、客体である物的対象をその精神構造の中に象徴的に取り込むという点で一致していた。文化テキスト主義は、象徴的秩序を精神構造の外に位置づけようとしている。しかし、文化メンタリズムと文化テキスト主義は精神構造の内と外の違いがあるにせよ、物的対象が象徴的秩序の産物、知識対象として現れるという点で変わりはなく、モノの位置に基本的変化があるわけではない。間主観主義にとって、社会秩序はコミュニケーションなど、主体間の象徴的相互作用の結果である。ハバーマスは、ポパーの分類に基づいて、物的世界である世界1は、世界3に属する象徴的言語相互行為の中で、会話することを通じて現れる知識対象として理解している。

レックヴィッツが問題にしたのは、(2)の思潮が知識社会学において見られた主体-客体関係から離れるという課題を意識しながら、モノを知識対象としてしかとらえていない弱みがあるために、この課題に十分に答えられなかったことについてである。

「問題は、知識対象というより、物質性を概念化し続けながら、文化理論の分野にあり、その展望を保持しつつ、代替的語彙を発見できるかという点にある。すなわち、「モノとともにある」人間行動を、主体或いは抽象的全体と活動との関係の中で付随現象としてではなく、社会秩序を社会的に安定した人工物の産物と見なすこと、最終的に、社会変化を人工物の変化とのつながりで見ること（物質主義的理論に陥ることなく）である³⁷⁾」。

この指摘に見るように、ここで行わなければならないのは、物質主義的理論に陥ることなく、「モノとともにある」人間行動の変化を、人工物の変化の中で考察することである。レックヴィッツにとって、この課題に答える思潮が(3)の社会的実践理論であった。彼がブルーノ・ラツールのアクター・ネットワークセオリー (Actor Network Theory, ANT) や彼の社会的実践理論研究に注目したのはそのためである。

ラツールに課せられたのは、モノを、知識対象として社会的に構築することではなく、「文化的なものや物質的なものとの「つながり」を把握する新しい（非モダニスト的な）言葉を生み出す」ことである³⁸⁾。モノは、人間が社会的実践を行う際に必然的に必要となる条件である。その条件は、一方で解釈されるものであるが、他方で、「その物質性の中で適用、使用、そして扱われるものでなければならない。モノとして、それらは任意に交換できるというものではない」。ここでは、モノ、或いは人工物は、主体-客体関係の中で把握されたり、主体によって解釈される対象ではなく、物的世界について確固とした推論を行うことが問題とされている。すなわち、モノが社会的実践を行う際の必要な条件と言う場合でも、主体から見て必要とされるモノというより、客体としてのモノ自体を独立して考察することである。関係性はその後で生まれる。ラツールがこの立場から編み出したのが「ネットワーク」という概念であった。主体-客体ではなく、独立した主体と独立した客体とのつながりをレックヴィッツは「ネットワーク」と表現している。誤解を恐れずに言えば、客体を独立

した主体として見ることである。レックヴィッツが「社会的ネットワークや実践は、人間とその「主観性」ばかりでなく、同時に非人間的行為者、社会的実践にとって必要で、言わば「平等な」構成要素であるモノから成り立っている」と述べているのはこの意味においてである。社会秩序は、間主観性の集まりであると同時に、間客観性の集まりでもある。シャツキは、実践主体とモノとのネットワークという関係性に限定せず、社会的存在論 (social ontology) の視座から、実践の組織化の中で果たすモノの位置 (シャツキはこれを編制 arrangement と呼んでいる) を確定し、社会的実践理論として鍛え上げていかなければならないことを強調している³⁹⁾。

モノが間客観性の集まりとして認識されたとき、文化理論の一翼にある社会的実践理論は、知識の象徴的構造の中で、モノをどのように認識するのだろうか。この問いに対するレックヴィッツの答は、「物質化された理解」であった。人は、何らかの行為を行う時しばしば道具を用いる。その道具 (=モノ) は行為を効果ならしめる条件として現れる。当たり前のことのように思われるが、モノが効果的に使用されるためには、社会的実践に統合された一部として、「それらは理解され、文化的コードのパラメーターのなかで扱われなければならない⁴⁰⁾」。

「人間主体は一定のモノに関する一定のノウハウ形態を発展させたとき、こうしたモノは、実践の中でこの知識を「物質化し」、「統合している」。モノは「物質化された理解」であり、物質化された理解としてのみ、それらは資源として機能することができる⁴¹⁾」。

ここで大事なことは、イタリックで強調されているように、実践の中で理解が物質化されていることである。モノを客観的な独立した存在として認めたとき、行為主体はそれを利用する際、モノの特性に応じたノウハウを理解し、身体化しなければならない。身体化とは、たんに肉体を使用するというのではない。物質化された理解を身体の中に取り込み、肉化し、精神の中に埋め込むことである。レックヴィッツが「文化的なるものと物的なるものとの反行動学的分裂を避けるために、実践の中で、身体ばかりでなく、人工物も、物質化された理解の形式で理解の場となっていることが強調されなければならない」と言う時、「物質化された理解」は身体を通した実践の中でこそ行き届くということの意味していた⁴²⁾。

社会的実践理論におけるこうしたモノの把握は、ボードリヤールが言語記号を駆使して、記号体系の中でしか指示対象をつかもうとしなかった構造とは根本的に異なっている。ボードリヤールの場合、モノは指示対象として、意味サレルモノとともに、意味スルモノとの間で分割され、その実体を消し去られている。その結果、モノは虚像化され、シミュレーションの世界へ誘い込まれている。社会的実践理論はそれに対して、モノを社会的実在として徹底的につかまえようとする。「特定の「モノ」が実践の必要要素であるとき、主体-主体関係は、社会的秩序の生産及び再生産に関する限り、主体-客体関係より優先していると主張することは出来ない⁴³⁾」のである。

Ⅶ 持続可能な消費から見たボードリヤール

ボードリヤールは、『消費社会の神話と構造』において、「成長とは豊かさである」、「豊かさは民主主義である」という二つの理想を現代社会において実現できるのは、消費を通じてであると述べている⁴⁴⁾。現代社会では、消費の拡大が豊かさにつながることで、そしてそれを平等に追求できることが、人々の求める幸福であるというイデオロギーが隔々に浸透している。しかし、ボードリヤールによれば、このイデオロギーが浸透した結果、人々は他者との差別化の中でしか自らの豊かさを示すことができず、しかもそれ自体誰にも強制されず、無意識に行っているものの、実は「コードに支配された差異化／個性化の図式の論理」がそこには貫いているという。ボードリヤールにとってこの論理を更に進めたのがシミュレーションの世界である。

このような結果的に大量消費につながっていく世界に、持続可能な消費はどのような論理を対置しているのだろうか。持続可能な消費を人々の節約心や健康志向、環境保全意識や公平意識に基づいた消費行為と見なすだけなら、環境意識が高まる一方で、何故人々は車に頻繁に乗るのか、1日に何度もシャワーを浴びたり、頻繁に外食する理由は何なのか、という問いに十分に答えることができなくなってしまう。この問いに対する答を、自己決定理論 (Self-determination Theory) や環境に優しい行動理論 (Pro-environmental Behavior Theory) のように、人々の主意主義的行為や動機づけに見出し、その地点から説明しようとすることは、ボードリヤールが明らかにした消費の「社会的論理」にからめとられてしまうだけでほとんど意味はない。説明しなければならないのは、このような行為が、日々の生活の中で慣習化され、日常化され、あたかも人々が自ら選んだかのように見える理由を、ボードリヤールが指摘する個性化や差異化の論理とは別の地平から説明することである。社会的実践理論に基づいた持続可能な消費はどのような地平に立って、記号的消費社会論を乗り越えようとしているのだろうか。両者を比較して気づくいくつかの論点を整理してみよう⁴⁵⁾。

第1に、消費分析の対象の違いである。消費を通じて個性 (アイデンティティ) を見つけようとする記号的消費論の特徴は、消費をコミュニケーション様式のひとつと見ているために、日常的消費の重要な部分が非顕示的であるという事実を忘れてしまっている。食材の購入、水や電気の使用、家庭インフラの整備、テレビ鑑賞など、人々が普段行っている行為は、日常的に繰り返し行われている消費の大半を占めている。これらは、日常的に行われている当たり前の行為であるだけに、顕示的消費になじみにくく、人々はここで自らのアイデンティティを確認し、個性を発揮しようしているという説明には相当無理がある。これらの消費行動の意味を追究するには、ボードリヤールとは異なる、別のアプローチと概念を必要とする。

第2に、文化的転回によって、消費と社会階層とのつながりを分析しようとする視座が相

対的に希薄になってしまっていることである。個人的アイデンティティや審美的表現に焦点を当てた消費分析が多くなる中で、社会的実践理論家の一人であるブルデューが『ディステインクション』などで追究していた社会階層分析は少なくなっていた。消費の「社会的論理」と言いながら、構造的に生み出されている消費のあり方に対する関心が薄くなってしまっている。

第3に、文化的分析の中で、モノやテクノロジーの位置、そしてそれらが果たす役割が邪魔者扱いされてしまっていることである。アラン・ウォードが指摘しているように、「文化的転回の主要な問題は、物的全体が知識対象として扱われ、物質それ自体として扱われなくなってしまう」ことである。

その結果、消費分析はどのように変貌してしまっただろうか。ウォードの次の指摘は非常に重要である。

「文化的分析には行為の一般理論に関して深い理論的弱点が含まれてしまっている。内的多様性がそこに見られるにもかかわらず、主な頼みとしているのは、主権を持った消費者、個人的アイデンティティやファッション化されたライフスタイルに対する関心に動機づけられた能動的で、表現し、選択する消費者モデルを支持するといった、自発的行為理論である。意識的、意図的決定が消費行動を方向付け、その感覚や方向性を説明することに意味を持たせることで、能動的で、再帰的主体モデルが支配するようになっている⁴⁵⁾」。

記号的消費社会論が、消費の「社会的論理」にからめとられた受動的消費者像を描いているにもかかわらず、ここでは消費主体が、自発的行為理論に裏づけられた「主権を持った消費者」、「能動的に表現する消費者モデル」として現れる逆説が指摘されている。このような消費者像では、新古典派経済学の消費者主権と殆ど変わるところはなくなってしまう。記号的消費社会論を主張する者なら、この逆説を、内示の意味を秘めたコードの支配から生まれる当然の現象であると説明するだろう。消費主体は、個性を発揮し、自らの拠り所をつかむために、予算制約に縛られながらも、自由な消費活動を行っているように見える。しかし、そのように見えてはいても、そこにはコードに支配された、呪縛された消費者しかいないのではないかと。

ウォードは、「文化的転回が自然の過程を歩んだ結果、消費に関する新しい理論的アプローチが期待されるようになっている」と述べている⁴⁶⁾。ここでウォードが言おうとしていることは、文化的転回が行われる中で、その中に含まれる様々な思潮（レックヴィッツが言う文化メンタリズム、文化テキスト主義、間主観主義）の問題点を指摘し、それを批判する社会的実践理論が登場する必然性である。社会的実践理論がはたすべき課題のひとつはこの逆説を批判することである。冒頭で述べたように、社会的実践理論に基づいた持続可能な消費の視座からボードリヤールの消費社会論を批判しようとする場合、言語記号論に基づいた消費社会論に対する持続可能な消費論による批判と、言語記号論に対する社会的実践理論に

よる批判，という二つの軸が交差している。交差する二つの軸から見た場合，この逆説はどのようにとらえられるだろうか。

まず，前者の軸である。ボードリヤールの消費社会論を検討して気づくのは，狭義の消費しか対象とされていないことである。ボードリヤールがシニフィアンとしての交換価値がシニフィエとしての使用価値や指示対象を支配していると言う場合，消費は市場での商品交換，したがって財の購入という限られた局面でしかつかまえていない。しかし消費は本来，財の購入とともに，それを専有し，利用し，廃棄するまでの全ての過程において理解されなければならない一連のつながりである。そこには，消費主体が自ら行う消費の評価も含まれている。ウォードが指摘するように，「現在使用されている「消費」という言葉は，購入するという意味と，使い尽くすという，二つの対立した意味の間で常に揺れ動く混合的概念となっている⁴⁶⁾」。消費を財の購入（交換）に限定してもよいというのであれば，交換価値を軸とした消費のあり様を分析するだけで済ますことも，モノを非在として扱うだけでも，かまわないかもしれない。しかし，ウォードのように，獲得，専有，評価といった一連の過程として定義するのであれば，全てを包括した消費理論が求められることになる。ボードリヤールのように，消費過程の一部だけを切り出し，あたかもそれが全ての過程を支配しているかのように描くことは，本質的にできないのである。消費過程の一部だけを対象とした結果，描かれる消費社会にも大きなずれが生じてしまう。

とくにそのずれは，使用価値とニーズ（＝欲求，必要）の認識のずれとして現れる。別稿でも紹介したように，持続可能な消費について最も頻繁に引用されているのは，「将来世代のニーズを危険にさらさないよう，自然資源，有害物質および廃棄物，汚染物質の排出を最小限に抑えつつ，基本的ニーズに対応し，より良い生活の質をもたらすサービスの使用」という「オスロ持続可能な消費シンポジウム」（1994年）の定義である。この定義に見るように，現在世代及び将来世代のニーズを実現することは，持続可能な消費にとって不可欠な構成要素である。持続可能な消費の目的である生活の質の向上とニーズの実現は本質的に同義である。とくに，肉体的健康の維持にあたる基本的ニーズや，適切な栄養のある食料や水，適切な住居，経済的安全保障などの中間的ニーズの実現は，財やサービスの有用性，すなわち使用価値と切り離すことができない。ここには，現存在を道具分析の中で把握しようとする，『存在と時間』に見られるハイデガー流の存在論が底流に流れている。

しかし，ボードリヤールからすると，使用価値の体系は必要（＝ニーズ）の体系であり，交換価値の体系を「自然化する」イデオロギーとしてしか現れない⁴⁷⁾。ニーズの実現は，産業社会の延命につながる需要喚起を促すだけに，その基礎にある使用価値を体系づけることは，「使用価値のフェティシズム」に翻弄されてしまうことになる。「欲求の概念は主要なイデオロギ的役割を演じており，欲求＝享受はその快樂主義的威信をもって欲求＝生産力の客観的現実を覆い隠してしまう」からである。

「使用価値の体系は、体系であることをやめることなく、つまり歴史的、論理的に交換価値の体系とつながっていることによって、交換価値の体系を自然化し、それに対して普遍的・非時間的なこの保証を提供する。この保証がなければ、交換価値の体系はまったく再生産されないだろう⁴⁸⁾」。このように、ボードリヤールからすれば、言語記号の分析に基づいて交換価値の体系の支配を明証化するだけでよく、使用価値も、ニーズの実現も、交換価値の支配を自然のものとするイデオロギーでしかなくなっている。ボードリヤールが、『記号の経済学批判』の中で、政治経済学の批判（ボードリヤールの場合マルクス経済学批判につながる）は、象徴交換の理論を展望しつつ、使用価値についての徹底的な批判と、記号や記号体系に対する批判の二つが含まれていなければならないことを求めているのも、そのためであった。

次に、後者の軸である。実践理論に基づく持続可能な消費がボードリヤールの描く記号に翻弄された消費者に対置するのは、実践を組織し、消費過程の全般にわたって理解する能力を持つ主体的な消費者像である。「消費の文化的分析には、行為の一般理論に内在する理論的弱点が深く刻まれていることである。内部の多様性や、重要な例外があるにもかかわらず、個人的アイデンティティや流行ライフスタイルの関心に動機づけられた消費者を選ぶことで、ますます自発的の行為理論に依拠した議論が行われていた⁴⁹⁾」というワードの先指摘は、ボードリヤールの言語記号論に基づいた消費分析にもあてはまる。消費を自らの意思で行う内省的能力を持つ者であろうと、記号に翻弄され、あてどなく漂う者であろうと、個人消費者を想定することは実践理論を除く文化理論の共通項であった。実践理論は、「主権を持つ個人や表現的個人に基づいているかどうかにかぎらず、個人的選択モデルに対する代替案を提起」というように、この共通項を崩すことを目指している。ワードは、「実践理論の主な意義は、行動変化の根拠が個人選択にあるのではなく、実践自体が変化する過程にあるという点にある⁵⁰⁾」と述べ、他の文化理論に見られる個人主義的モデルからの脱却を課題として挙げている。問題は、この後に登場する消費者の具体的な姿である。

持続可能な消費は、身体化され、慣習化され、電気、水道、ガスなど消費インフラが家庭の隅々に行き渡り、その制約の下で日常生活を営まなければならない消費様式の変革を目指している。拘束された生活条件の中で消費のあり方が狭く限定され、結果的に非持続的になっているのであれば、それに抵抗するには、消費を取り巻く文脈を集団的に変更しようとする意思を持つ消費者が育っていなければならない。消費実践の組織化には、既存の消費様式を受け入れ、身体化しているという意味と、それを別の様式に変えようとするもうひとつの意味が並行して存在している。言語記号が培う言説的意識と、社会的実践理論がその構成要素としている実践意識はその点で決定的に違っている。しかも、前者の場合、個人の私的な精神状況からしか消費様式を内省しようとしなないのに対して、社会的実践理論は他者との共有理解を含めた集団性の中で再帰的に見直そうとしている。

VIII 結びに代えて

本稿では、1980年代以降わが国で席捲してきた記号的消費社会論を、ボードリヤールの議論を中心に、持続可能な消費という視座から批判的に検討してきた。ボードリヤールの記号消費社会論がわが国で紹介されてからすでに30年以上経過している。この間、これに代わる、注目に値する消費社会論はほぼ皆無であったと言ってよい。ボードリヤールに基づいた研究成果が次々と発表される一方、ボードリヤールを批判的に受け止める研究蓄積は乏しかった。何故なのだろうか。我が国の社会科学のあり様を振り返るためにも、その理由を根本的に問うことがあっても良い。

注

- 1) ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（今村仁司・塚原史訳）、紀伊國屋書店、1995年、23頁。
- 2) ボードリヤール『象徴交換と死』（今村仁司・塚原史訳）、筑摩書房、1982年、13頁、22頁。
- 3) Andreas Reckwitz, *Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing*, *European Journal of Social Theory*, 5 (2), 2002, pp. 245-246.
- 4) *ibid.*, 250.
- 5) Theodore Schatzki, *Social Practice A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, 1996., p. 12.
- 6) *ibid.*, p. 13.
- 7) Andreas Reckwitz, *The Status of the "Material" in Theories of Culture: From "Social Structure" to "Artefactes"*, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 32-2, 2002, p. 211.
- 8) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店、1981年、237頁。
- 9) 白石哲郎「文化的転回と機能主義における文化社会学—「文化の社会理論」の構築へ向けた一試論—」『佛大社会学』、40号、2016年、28頁。
- 10) Theodore Schatzki, *The Site of the Social*, 2002, p. 77.
- 11) Theodore Schatzki, *Social Practice A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, 1996, p. 92.
- 12) ウィトゲンシュタイン『ウィトゲンシュタイン全集8 哲学探究』（藤本隆志訳）、大修館書店、1976年、161頁。
- 13) Theodore Schatzki, *Social Practice A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, 1996, p. 95.
- 14) Theodore Schatzki, *Social Practice A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, 1996, pp. 98-99. シャツキは、「規則解釈が言語による規則の明示的表明であるのに対して、規則は行為が暗黙のうちにつかまえ、応用しうる定式である。定式が暗黙のうちにつかまえられるということの論点の一部は、定式の理解が、それを述べたり、述べる事が出来るということと同じではない」と述べている (Do., *Practices and Actions A Wittgensteinian Critique of Bourdieu and Giddens*, *Philosophy of the Social Sciences*, 27-3, 1997, p. 299.)。

- 15) 永井均『ワイトゲンシュタイン入門』ちくま新書, 1995年, 154頁。
- 16) 岸政彦「規則と行為—エスノメソドロジー批判の新しい地点—」『ソシオロギス』18, 156頁。
- 17) ボードリヤール『記号の経済学批判』(今村仁司他訳), 法政大学出版局, 1982年, 155頁。
- 18) 同, 169頁。
- 19) 同, 170頁。
- 20) 同, 179頁。
- 21) 同, 184頁。
- 22) 同, 184頁。
- 23) 同, 191~192頁。
- 24) 亘明志『記号論と社会学』ハーベスト社, 2004年, 91頁。
- 25) 同, 91頁。
- 26) ボードリヤール『記号の経済学批判』(今村仁司他訳), 法政大学出版局, 1982年, 198~199頁。
- 27) 丸山圭三郎『文化記号の可能性 (増補完全版)』夏目書房, 1993年, 53頁。
- 28) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』岩波書店, 1981年, 120頁。
- 29) 同, Ⅲ - 第1章参照。
- 30) 同, 123頁。
- 31) 丸山圭三郎『文化記号の可能性 (増補完全版)』夏目書房, 1993年, 51~52頁。
- 32) ボードリヤール『記号の経済学批判』(今村仁司他訳), 法政大学出版局, 1982年, 199頁。
- 33) 同, 201頁。
- 34) Andreas Reckwitz, The Status of the “Material” in Theories of Culture: From “Social Structure” to “Artefactes”, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 32-2, 2002.
- 35) *ibid.*, pp.195-196.
- 36) *ibid.*, p. 202.
- 37) *ibid.*, p. 206.
- 38) *ibid.*, p. 207.
- 39) Theodore Schatzki, Materiality and Social Life, *Nature and Culture*, 5 (2), 2010.; Matt Watson, Placing Power in Practice Theory, Allison Hui et. al. (ed.), *The Nexus of Practices*, 2017, pp. 178-182.
- 40) Andreas Reckwitz, The Status of the “Material” in Theories of Culture: From “Social Structure” to “Artefactes”, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 32-2, 2002, p. 212.
- 41) Reckwitz, *ibid.*, p. 212.
- 42) Reckwitz, *ibid.* pp. 212-213.
- 43) Andreas Reckwitz, Toward a Theory of Social Practices A Development in Culturalist Theorizing, *European Journal of Social Theory*, 5 (2), 2002, p. 253.
- 44) ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(今村仁司・塚原史訳), 紀伊國屋書店, 1995年, 51頁。
- 45) Alan Warde, After taste: Culture, consumption and theories of practice, *Journal of Consumer Culture*, 14 (3), 2014, p. 280.
- 46) この点については, Alan Warde, *Consumption Sociological Analysis*, 2017を参照。ウォード

は、消費を、獲得、専有、評価の全てを含む過程として理解することは、「使用価値から象徴価値への転換を追究したボードリヤールの研究は反転されることになる」と指摘している。

- 47) ボードリヤール『記号の経済学批判』（今村仁司他訳），法政大学出版局，1982年，170頁。
- 48) 同，171頁。
- 49) Alan Warde, After taste: Culture, consumption and theories of practice, *Journal of Consumer Culture*, 14 (3), p. 283.
- 50) Alan Warde, *Consumption Sociological Analysis*, 2017, p. 174.